

10. 卵巣悪性中胚葉性混合腫瘍 3 例の臨床病理的検討

島 由美子・滝沢 憲・佐藤美枝子・
古市郁子・井口登美子・武田佳彦（産婦人科）
平山 章（病院病理）

11. 動物の自然発生腫瘍 1. イヌの悪性黒色腫の 1 剖検例

金井孝夫・小山生子（実験動物中央施設）
伊藤弘一（ダクタリ動物病院文京病院）
西川俊郎・笠島 武（第 2 病理）

12. Human-T cell lymphotropic virus type I (HTLV-I) associated myelopathy (HAM) の 1 剖検例

佐々木彰一・小森隆司・小林逸郎・竹宮敏子・丸山勝一（神経内科）
武石 詢（第 1 病理）

閉会の辞 豊田智里（第 1 病理）

1. 猫泣き症候群の長期生存した 1 剖検例

（第 1 病理）金田 良夫・付 強・
河上 牧夫・武石 詢
（心研小児科）里見 元義

症例は18歳8カ月と長期生存した女性患者で3カ月検診で Cri du Chat syndrome と VSD と診断され3歳頃まで仔猫のような泣声であった。18歳8カ月で穿孔性胃潰瘍で腹膜炎を起こして死亡した。外見上、小頭症、小顎症、長頸、内眼角隔離、内眼角贅皮、眼列狭小、耳介低位、歯列不整、鳩胸等特有な顔貌を呈し、染色体検査では染色体数46, XX, del(5)(p¹³-ter)であった。剖検の結果では常染色体異常に基づく一群の形成異常があり、特に喉頭の低形成(喉頭蓋が短く、喉頭蓋谷が狭い、後交連の slit 状の間隙、輪状軟骨の形成不全と内腔への半月状膨隆、声帯が短く diamond 状に開いていた)を認め、これが発声の異常を惹起したものとされた。直接死因となった胃潰瘍は胃体部に1.2×2.8cmの潰瘍と一部穿孔し、汎腹膜炎を併発していた。VSDは大動脈弁直下膜様部の2×2cmと大きく末期には右心不全徴候が前景に出ている。本症の1剖検例について若干の文献的考察を加えた。

2. 治療に苦勞した副鼻腔真菌症の 1 例

（耳鼻咽喉科）山本 信和・黒田 令子・
児玉 章・石井 哲夫
（病院病理）平山 章

一側副鼻腔陰影を示す患者の診察に際して考慮すべき疾患の1つに真菌症がある。今回は種々の治療にもかかわらず、徐々に進展した鼻副鼻腔真菌症(アスペルギルス症)の1症例を経験したため報告した。初診時右上顎洞~篩骨洞~眼窩内に真菌の進展を認めたため、摘出手術を行った。この時の病理所見では壊死物

質のみならず組織内に侵入し、周囲に形質細胞・リンパ球浸潤、組織球の増生を伴う中に多量の真球を認めた。形態からはアスペルギルスが示唆されたが、これは培養検査で確認された。またPAS染色、Grocott染色を行い、真菌の形態の検討を行った。臨床的には再発を反復する毎に局所進展を示し、眼窩内に大量に侵入したため、拡大上顎全摘+眼球摘出を施行し、真菌は制御され、患者は退院となった。しかし在宅中に脳梗塞を発症し、死亡した。

以上我々が治療に苦勞した鼻副鼻腔真菌症の1症例を報告した。

3. 硬化性胆管炎に特異な慢性膵炎を合併した例の病理学的検討

（第二病院中央検査部）藤林真理子
（第二病院外科）菊池 友充・
熊沢 健一・梶原 哲郎

69歳の女性。黄疸を指摘され、腹部エコー、PTC造影などで下部胆管癌が疑われ、膵頭十二指腸切除術を施行された。

膵は、術中に頭体尾部全体の腫大が確認された。手術材料では、膵頭部は腫大し、Vater 乳頭より約3.5cmにわたる総胆管の狭窄を認めた。

組織学的には、膵は実質の破壊を伴ったび慢性慢性膵炎を示した。浸潤細胞はリンパ球と形質細胞が主であった。膵管上皮の過形成や化生、蛋白栓は認めない。総胆管壁は、狭窄部のみならず非狭窄部も、炎症細胞浸潤を伴った線維性肥厚を示し、好酸球浸潤がかなり目立つ。組織像と PTC 造影より硬化性胆管炎の合併を考えた。

本例は原因不明のび慢性慢性膵炎に硬化性胆管炎を合併した特異な例で、免疫異常が示唆される。Sjögren

症候群で慢性肝炎と硬化性胆管炎の合併例の報告があるが、本例も今後唾液腺腫脹の出現等に注目する必要がある。

4. 心房性ナトリウム利尿ペプチドの心内膜線維彈性症における免疫組織学的検討

(第2病理) 西川 俊郎・笠島 武
(放射線科) 広江 道昭
(第2内科) 成瀬 光栄・成瀬 清子
(心研) 中島 裕司

心房性ナトリウム利尿ペプチド (ANP) の心室における分布についてはまだ不明な点が多い。われわれは乳幼児期にしばしば重症心不全を呈する心内膜線維彈性症 (EFE) の心室筋における ANP の存在および分布について免疫組織学的に検討した。

EFE 剖検例の心筋標本のパラフィン包埋切片を、抗ヒト ANP 抗体を用いて酵素抗体法 (ABC 法) により免疫組織染色を行うと、14例中10例 (71%) の心室筋に ANP 陽性細胞が認められた。陽性細胞は心内膜側に多く分布し、その細胞横径は陰性細胞に比べて有意に大きかった。ANP 陽性反応は、細胞内の核周囲に集中するか、細胞質内にびまん性にみられる場合が多かったが、細胞の辺縁に観察される例もあった。

ANP 陽性細胞は高度に拡張した心室の心筋に多く認められ、その発現と重症心不全との間に密な関連があると思われた。

5. 甲状腺乳頭癌由来 thyroglobulin に対する mouse monoclonal 抗体の免疫組織化学的検討

(病院病理科) 相羽 元彦・平山 章
(内分泌外科) 金地 嘉春・藤本 吉秀
(放射線科) 日下部きよ子
(内分泌内科) 佐藤 幹二

甲状腺乳頭癌から得られた thyroglobulin (TG) に対する3つの mouse monoclonal 抗体 (P1, 2, 3) の免疫組織化学的特徴を、市販のヒト TG に対する rabbit polyclonal 抗体 (pTG) と比較した。

結果：1次抗体との反応前に正常家兔血清 (×5) または pTG (×5) を作用させると、後者において、P1, 2, 3の染色性は著しく減弱した。3抗体は、pTG と基本的には同様の染色性を示し、必ずしも乳頭癌の染色性が優れていることはなく、逆に癌において低い場合もあった。3抗体は抗原量の多い部位では pTG より強い染色性を示し、少ない部位では弱い染色性を示した。Dyshormonogenetic goiter またはその疑いの4例のうち3例は、pTG と P2では濾胞上皮に強い染

色性を認めたが P1による染色性は全て或いは限局性に消失した。

討論：3抗体は pTG の抗原認識部位の一部を認識するものと思われる。P1を他の TG に対する抗体と組み合わせて染色することにより、dyshormonogenetic goiter や乳頭癌の亜型の診断に役立つ可能性がある。

6. 喉頭乳頭腫の1例

(耳鼻咽喉科) 岡村 玲子・高山 幹子・
石井 啓夫・吉原 俊雄
(病院病理) 平山 章

症例は22歳の男性。平成元年2月始め頃より出現。徐々に嗄声が増悪するため同年8月3日当科初診となる。喉頭ファイバースコープにて、右声帯に小腫瘤を認めため精査目的で8月21日当科入院となる。8月22日全身麻酔下にてマイクロラリゴサージャリー施行した。採取した組織の病理組織学的検査の結果、若年型喉頭乳頭腫と診断された。また、ABC法を用いた免疫組織学的検査および in situ hybridization 法によるウイルス核酸の検出を試みたところヒトパピローマウイルス6型が証明された。本症例では、腫瘍の声門下方への進展が予想され、経口からの挿管による操作では、十分なレーザー手術は不可能なため、喉頭截開術を行った後に、病変部位のレーザー焼灼を行った。術後は3週間頃より嗄声も軽快し、腫瘍は縮小した。今後もお経過観察が必要である。さらに、ヒトパピローマウイルスのタイプ同定の確認のため、現在 DNA 描出による検索を行っている。

7. Suprasellar epithelial cyst の1例

(脳神経外科)

久保 長生・内布 英昭・村垣 善浩・
仁田 仁恵・荒 徹昭・加川 瑞夫

中枢神経系には arachnoid cyst, ependymal cyst, choroid epithelial cyst, enterogenous cyst, respiratory epithelial cyst, などが知られているが、この鑑別診断については電顕検索が不可欠である。今回われわれは下垂体腫瘍として診断された cystic lesion を経験したので、その組織学的所見について報告する。

症例は57歳の女性。下垂体腫瘍の診断のもと手術がなされ、嚢胞性であり、透明な液が見られた。組織学的所見は立方上皮細胞からなる被膜で一部に重層上皮細胞が見られた。PAS染色では一部に陽性細胞をみた。免疫染色では GFAP, S-100, NSE 共に陰性であった。電顕所見は microvilli を有する一層の細胞で細胞間には junctional complex が見られ、その外側には